

1177 食道シンチグラフィを用いた食道静脈瘤結紮術後の食道機能の検討

西野執、成木行彦、中谷尚登、小山博、北條裕、近藤栄作、山田秀一、瓜田純久、大塚幸雄（東邦大一内）

食道静脈瘤結紮術後に食道シンチグラフィを施行し、食道機能の検討を行った。対象は食道静脈瘤結紮術を施行した 14例。またクリップ結紮例、硬化療法例との比較検討も行った。方法は治療前と治療翌日、14日後に Tc-99m スズコロイド (19-37MBq) を蒸留水 20ml で混和し座位にて内服させ、上部、下部食道、E-G junction に関心領域を設け撮像し、時間放射能曲線を作成し検討した。結果では翌日の食道通過時間には低下が認められたが、14日後には改善していた。他との比較ではクリップ結紮術例よりも硬化療法に近い成績が得られた。またリングの個数による比較も行い検討を加えたので報告する。

1178 食道シンチグラフィを用いた食道狭窄ステント留置例における通過能の検討

今井幸子、阪口昇二、今井照彦、佐々木義明、松尾祥弘、吉村均、大石元、前田宗宏、打田日出夫（奈良医大放・腫放）村上悦子、上野山文男（同 中放）

健常例 9例および食道癌による食道狭窄に対してステント留置を行った 6例を対象として、食道シンチを用いて通過能を検討した。食道シンチは生食 20ml に混じた ^{99m}Tc -DTPA を座位および仰臥位で嚥下させ、0.5 秒間隔で 2分間連続でデータを収集して行った。食道通過能の評価は、上部、中部、下部における時間放射能曲線から通過時間 (EET) を測定した。健常例では EET は、いずれも座位、仰臥位で体位による差はみられなかったが、ステント留置例では座位に比べて仰臥位で EET は著明に遅延がみられた。ステント留置例では経口摂取時の体位に留意することが重要である。

1179 maximum activity projection 法と volume rendering 法を用いた門脈側副血行路の立体表示

柏木 徹、東 正祥、長沢昌史、外山 隆、田中好男、尾崎晋一、伊東彰彦、内藤雅文、石橋一伸（大阪厚生年金病院内科）

我々は門脈圧亢進症における門脈側副血行路の診断に腹部血液プールの SPECT が有用であることを報告してきた。今回、門脈側副血行路の描出法として投影方向の pixel 上で最大 count を投影する maximum activity projection 法に立体感をもたせるために volume rendering 法を加味した立体表示法が有用であったので報告する。

対象は門脈圧亢進症例で、 ^{99m}Tc -HSA-D を静注して腹部血液プールの SPECT を行った後、その transverse 像から立体表示を行った。本法は輪郭抽出操作が自動的に行えらるとともにリアルタイムで門脈側副血行路や他の血管の立体像が得られるため、側副血行路の診断に有用であった。